

スペインと日本の初等美術教育の比較(1)

— 描画指導に関わる題材の分析を中心として —

網谷 夏実, 隅 敦

Comparison of Art Education in Elementary school between Japan and Spain

— Analysis of the subject matter in drawing practice —

Natsumi. AMITANI, Atsushi. SUMI

要 約

本研究は、スペインの初等美術教科書における題材の特徴を、主として描画指導に関わる題材の分析を通して、日本の教科書題材との違いに焦点を当てて明らかにしようとしたものである。まず、スペインの初等美術教科書の構成を整理した。次に、教科書の目次から内容の概要を翻訳し整理したところ、主に平面の題材が多く、概ね作品鑑賞から制作に移るという過程が確認できた。一方、日本の教科書においては配当されていない(1)臨画の題材、(2)ぬり絵をする題材、(3)絵の描き始めが示されている題材、(4)背景が既に描かれている題材について、実際に制作を行いながら、詳細な分析と考察を行った。そこでは、発想や構想の能力の育成よりも対象を正確に写し取る技術を重視する特徴が見いだされた。さらに、スペインの教科書で特徴的であったぬり絵に焦点を当て、日本の初等美術教育においてぬり絵が扱われていない理由を考察し、①山本鼎の自由画教育運動の影響、②玩具として認識されていること、③教育的効果に対する否定的な意見、④評価を伴う場合の問題の四点を導き出した。

キーワード：スペイン、美術教科書、図画工作科、学習指導要領、臨画、ぬり絵

keywords：Spain, Art Textbook, Art and Handicraft Subject, Course of Study, Copying Casting Sketch, Coloring

はじめに

本研究は、筆頭者が所属する図画工作科ゼミナールの研究交流¹で、スペインで用いられている初等美術教育の教科書を閲覧したことがきっかけになっている。スペインの初等美術教科書は、手本を見ながら模写をする題材や、教科書から材料を切り取って組み立てる組み立て式の題材がある等、日本の教科書題材と相当な違いがあることが一見して分かる。

日本において、教科書とは、「小学校、中学校、高等学校、中等教育学校及びこれらに準ずる学校において、教育課程の構成に応じて組織排列された教科の主たる教材として、教授の用に供せられる児童又は生徒用図書であつて、文部科学大臣の検定を経たもの又は文部科学省が著作の名義を有するもの」と定義されている²。また、学校教育法第34条では、「小学校においては、文部科学大臣の検定を経た教科用図書又は文部科学省が著作の名義を有する教科用図書を使用しなければならない」と定められている。このように、教科書は、日本においては教科の

主たる教材として位置づけられており、教科書を中心に学習が進められることが求められている。教科書の題材を分析することは、今後の指導の在り方を考えていく上で重要だと考える。

本研究では、スペインの教科書題材を実際に制作することで、その内容の指導に関する傾向の分析を行う。また、両国の教科書の中で似た内容を取り扱っている題材を取り上げ、比較・分析を試みる。

分析では、スペインの教科書題材を、日本の学習指導要領の内容を参考に、絵に表す題材、立体に表す題材、工作に表す題材、鑑賞する題材の四項目に分類した。そして、絵に表す題材に分類される題材を内容ごとに整理し、実際に題材を制作しながら分析を行った。なお、造形遊びをする題材は、分析対象のスペインの教科書には存在しなかった。

1. 先行研究について

スペインの美術教育の現状について、教科書分析を中心に研究を行っている先行研究としては、藤井康子と金子亨の論文が詳しい。

以下にその概要を整理し、本研究に至った。

「スペインの美術教育の現状Ⅰ—教科書分析を中心として ①初等教育の段階—」では、スペインの小学校で使われている教科書を、スペインの教育制度や美術教育の現状を踏まえ、日本の教科書と比較し研究を行っている³。教科書の分析結果では、「教科書そしてそれを形作る教育観の中核をなすものは芸術を通した生活の向上、技術を重視した実用的芸術の美という概念であること」だと述べている⁴。教科書の題材設定については、子どもの興味・関心を引き出す手段として「挿絵のバラエティの豊富さと親しみやすさ」をあげる一方で、「一斉に臨画法を用いる教育の場や皆が同じものを作る・組み立てるといった場には、個としての表現や創造性よりは技術の教育としての性格が色濃く反映されている」と指摘している⁵。また、教科書内容については、「絵画の分野では自由画よりも圧倒的に臨画、罫画が重視されている」とし、「子どもに美術における基本的技術・技能・理論を身につけさせることが一番の目的となっている」としている⁶。

「スペインの美術教育の現状Ⅱ—教科書にみる制度及び内容に関する研究（初等教育）—」では、美術教科書の背景にあるスペインの美術教育の歴史や教科書制度について考察を行い、美術教科書や関連図書の特徴について分析を行っている⁷。「スペイン美術教科書にみられる様々な影響」では、ユネスコ機関やバウハウス、構成主義の抽象芸術からの影響を指摘している⁸。また、前回の研究を踏まえ、スペインの美術教科書を構成する要素を三点あげている。一点目は、五感の中で「視覚」が重要な位置を占めているということ⁹。二点目は、模写や組み立てる作業など「教育的あそび」を重視しているということ¹⁰。三点目は、「抽象的思考の発達」である¹¹。さらに、臨画や罫画、工作の組み立て式題材について、「マニュアル化の傾向」がみられ、「子どもの感性や創造性を抑制し精神的豊かさを育成することが困難になる」と考察している¹²。

「スペインの美術教育の現状Ⅲ—教科書における基礎的な力の育成について（初等教育）—」では、スペインの教科書制度の概要を踏まえ、Santillana社とANAYA社の二社の美術教科書の分析や諸法令の収集から、教科書の現状と動向を明らかにしている¹³。結論では、「スペインの美術教科書で特徴的なのは、絵画における罫画や臨画が全ての造形表

現に通ずる基礎的な力の育成に不可欠な学習として位置づけられていること」だとし、「ここでは対象を正確に写し取る観察力や技術力の発達が目的とされているだけでなく、子どもが感じ取った世界を『絵によって一種の言語のように自らの意思を伝達するコミュニケーション方法の習得』が目的とされている」と指摘している¹⁴。

「スペインの美術教育の現状Ⅳ—初等美術教科書にみられる教育内容の一例—」では、エスエム社とルイスヴィヴェス社の2社の初等美術教科書を取り上げ、内容構成の特徴を分析し、教材の教育目的について考察している¹⁵。教科書の教材の教育目的の考察では、「絵画の教育目標」として、「①美的な表現の実現」、「②描画技術の習得」、「③観察力、表現力の育成」、「④道具の操作と活用方法を身につける」という四点をあげている¹⁶。また、まとめとして、「スペインの美術の教科書で特徴的なのは、点・線・面を基本要素とする絵画の題材が、全ての造形表現に通ずる基礎的な力の育成に不可欠な学習として位置づけられている点と、第1～6学年まで系統的な教育内容が編成されている点である」と述べている¹⁷。

以上のように、藤井康子と金子亨は各研究においてスペインの美術教育の現状について言及している。描画指導については、自由画よりも臨画、罫画が重視されており、表現や創造性よりも、技術や技能を身につけさせることが目的とされていると分析している。

2. スペインの初等美術教科書の概要

本分析に使用した教科書は、Santillana社の『Dibujo y pintura 2 PRIMARIA』2007年版である（図1参照）。Santillana社は大手教科書会社で

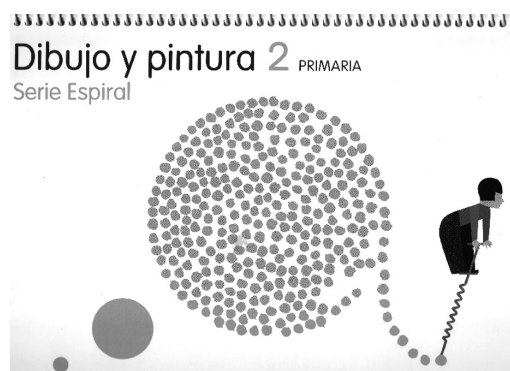


図1 『Dibujo y pintura 2 PRIMARIA』2007年版の表紙

あり、スペイン国内だけでなく、ラテンアメリカなどスペイン語圏の国々18カ国で販売されているという¹⁸。教科書の大きさはA4サイズより大きく¹⁹、リング製本である。全編カラー印刷で、書き込み式をとっている。この教科書の内容は、二つのブロックに分けられ、一つ目は「Dibujo (素描)」であり、ここでは、形、色、空間的な組織図の演習をすることになっている。説明では、「Educación Perceptiva (知覚教育)」という言葉が強調されている。二つ目は「Construcción (組み立て)」であり、教科書に印刷された絵を切り取り、組み立てる方法をとっている。教科書題材は二次元 (BIDIMENSIONALIDAD) と三次元 (TRIDIMENSIONALIDAD) で大きく分類されている。二次元には「素描」、三次元には「組み立て」が含まれる。

スペインと日本、それぞれの教科書内容を項目別に比較できるように表2を作成した。日本の教科書は、『ずがこうさく 1・2下 おもったことを』(日本文教出版, 2011)を使用し、項目は、現行の日本の学習指導要領を基準にし、「造形遊びをする活動」、「絵に表す活動」、「立体に表す活動」、「工作に表す活動」、「鑑賞する活動」の五項目で分類し、スペインの教科書の内容と対応させてみた。この結

果から、スペインの教科書内容項目では、絵に表すと工作に表すが中心であり、各内容項目に分けられている日本の教科書と大きく異なることが分かる。

表2 現行の日本の学習指導要領を基に分類した両国の初等美術教科書内容の項目別統計

	造形遊び	絵	立体	工作	鑑賞	総数
スペイン	0	18	1	6	0	25
日本	4	7	4	5	1	21

3. スペインの初等美術教科書題材の特徴の分析

スペインの教科書の主な題材は、絵に表す活動と工作に表す活動である(表2参照)。以下の表3と表4に、スペインの教科書の目次とその内容の概略を示した。平面の題材は、「BIDIMENSIONALIDAD (二次元)」に含まれ、「EDUCACIÓN PERCEPTIVA (知覚の教育)」と「ELABORACIÓN PLÁSTICA (造形の作成)」の二つに分類される。「知覚の教育」では題材の導入として、作品の鑑賞を行う。「造形の作成」では、絵に表す活動を行う。一方、立体や工作に表す題材は、「TRIDIMENSIONALIDAD (三次元)」と表されている。なお、表3と表4において、題材名の下【 】内に、それぞれの題材が属すと考えられる項目を示した。

表3 スペインの教科書の平面の題材の目次

BIDIMENSIONALIDAD (二次元)			
EDUCACIÓN PERCEPTIVA (知覚の教育)		ELABORACIÓN PLÁSTICA (造形の作成)	
題材名	内容	題材名	内容
①Un retrato diferente (違った肖像画) 【鑑賞】	Paul Klee 作の「Senecio.」(幾何学的な図形を使用し人物を描いた作品)を鑑賞する。	Dibujar personajes (人物を書く) 【絵】	好きな材料を用い、幾何学的な図形に基づいて描画する。
②Lugares pintados (有色の場所) 【鑑賞】	Enrique Martínez Cubells 作の「La Puerta del Sol. (プエルタ・デル・ソル)」と Joan Miró 作の「La Masía. (農家)」を鑑賞し、赤と青で作品の一部を取り囲む。	Dibujar paisajes (風景を描く) 【絵】	輪郭線が描かれている風景の絵に、何が隠れているか予測し、クレヨンで描画する。
③Los colores del mar (海の色) 【鑑賞】	青空と夕焼け空という、異なる時間に撮った海の写真を鑑賞し、それぞれの海の色についての質問に答える。	Dibujar sobre dos colores (二つの色の上に描く) 【絵】	青とオレンジの背景の上に、クレヨンで風景を描く。(なお、青の背景には手本として既に絵が描き込まれている。)
④¿Qué dicen las señales? (記号は何を示す?) 【鑑賞】	図とその意味に当てはまる言葉を照らしあわせる。	Inventar carteles (ポスターを考案する) 【絵】	図形を選び、組み合わせて、ポスターを考案する。
⑤Un ciclista al sol (日中のサイクリスト) 【鑑賞】	逆光で黒いシルエットのように見える自転車に乗った人物の写真を鑑賞し、質問に答える。	Dibujar en negro (黒で描く) 【絵】	見本を見ながら、黒のマーカーでシルエット画を描く。

⑥Estamos en Navidad (それはクリスマスだ) 【鑑賞】	クリスマスの彫刻や絵画を鑑賞し、そのイメージの違いに関する質問に答える。	Dibujar la Navidad (クリスマスの絵を描く) 【絵】	薄く着色された絵の上に、好きな材料を用いてクリスマスの絵を描く。
⑦Colores diferentes (異なる色) 【鑑賞】	赤、黄、青と黒のコンポジションを使った Joaquín Torres García 作の牛の像と絵画を鑑賞し、形や色に関する質問に答える。	Inventar decoraciones (装飾の考案) 【絵】	手本を参考にし、描き始めがしるされた絵に色鉛筆で描画する。
⑧Flores de colores (色とりどりの花) 【鑑賞】	様々な色の花の写真を見て、色や形についての質問に答える。	Colores y flores (色や花) 【絵】	筆や指、画用紙など様々な描画材料を使用し、花の絵を描く。
⑨Carnaval, Carnaval (カーニバル、カーニバル) 【鑑賞】	月と太陽の衣装や、そのモチーフの画像を見て、違いや同じ点を考える。また、画像が好きな理由などを答える。	Dibujar disfraces (衣装を描く) 【絵】	太陽や月、星のモチーフを擬人化させ、その衣装を描く。
⑩Animales salvajes (野生動物) 【鑑賞】	動物の写真と絵を見て、対応しているもの同士を線で結ぶ。また、動物の絵の下に名前を描く。	Dibujar animales (動物を描く) 【絵】	パンダとトラの絵の見本を見て、動物の絵を描く。
⑪La noche (夜) 【鑑賞】	Vincent Van Gogh 作の「Noche estrellada. (星月夜)」を見て、それに似たいくつかの絵の中から似ていると思うものを囲む。	Colorear el día (昼間のぬり絵) 【絵】	木々の絵が薄く描かれた背景に、クレヨンで絵を描く。
⑫Cerámica popular (民族陶芸) 【鑑賞】	スペインの民族陶芸品の写真を見て、その一部が切り取られたピースが写真のどこに当てはまるかを答える。	Dibujo sobre manchas (マンチャの上に描く) 【絵】	マンチャ (汚れ) という技法で描かれている絵に、マーカーで民族陶芸品の絵を描く。
⑬Iguales y diferentes (同じと異なり) 【鑑賞】	Paul Cézanne の同じ街の風景を描いた二つの絵を見て、どんな建物が描かれているか等の質問に答える。	Trazar líneas (線を描く) 【絵】	手本を参考にしながら、マーカーやクレヨンで自由に街を描く。
⑭Fotografías con retoques (写真の修整) 【鑑賞】	二つの絵を見て、どちらが写真に似ているかを答え、その理由や違いを説明する。	Un desierto diferente (別の砂漠) 【絵】	砂漠の写真の上にマーカーで絵を描く。異なった線の種類を使って描画する。
⑮Frutas y hojas (果物や葉) 【鑑賞】	果物と葉の写真を見て、色や形に関する質問を true または false で答える。	Estampar con frutas (フルーツとスタンプ) 【絵】	果物でスタンプングをする。その後、クレヨンで装飾する。
⑯Una escultura o dos esculturas (一つの彫刻または二つの彫刻) 【鑑賞】	異なる角度から撮った二枚の彫刻の写真を見て、その見え方の違いについての質問に答える。	Hacer figuras (形を作る) 【絵】	色画用紙で形を作り、貼り付けて絵に表す。その後、マーカーで装飾する。
⑰Un bosque quemado (焼けた森) 【鑑賞】	焼けた森の写真を見て、そこから感じ取った気持ちについての質問に答える。	Un bosque vivo (生きている森) 【絵】	森が描かれた絵のぬり絵をする。
⑱Egipto antiguo (古代エジプト) 【鑑賞】	二枚のエジプトの絵を見て、それぞれに当てはまる文章を対応させる。	Mensajes ocultos (隠されたメッセージ) 【絵】	描き始めの絵を参考にし、各シンボルの意味を考案して、象形文字でメッセージを描く。

表 4 スペインの教科書の立体と工作の題材

TRIDIMENSIONALIDAD (三次元)	
題材名	内容
①Personajes divertidos (愉快な人物) 【工作】	人形を作る題材。教科書に印刷された絵を切り取り、完成写真を見ながら、好きな部品を組み合わせたり、必要な材料を加えたりして制作する。
②Una careta de pirata (海賊マスク) 【工作】	海賊のお面を作る題材。教科書に印刷された海賊の顔を切り取り、耳の部分に輪ゴムを取り付けて制作する。

③Una marioneta famosa (有名な人形) 【工作】	人形を作る題材。人形には羽があり、割りピンを使って可動する仕組みを作る。
④Una rana sin nombre (名前のないカエル) 【立体】	立体のカエルを作る題材。教科書に印刷された部品を全て切り抜き、貼り付けて組み立てる。
⑤Escenario espacial (宇宙の状況) 【工作】	宇宙の模型を作る題材。教科書に印刷されたロケットやトラックなどの部品を切り取り、土台となる絵に貼り付けて組み立てる。ロケットには、上下に可動する仕組みを作る。
⑥Un coche de aventura (車の冒険) 【工作】	車の模型を作る題材。教科書に印刷された車の部品を切り取り、組み立てる。車輪の部分には割りピンを使用し、可動する仕組みを作る。
⑦El búho reloj (フクロウ時計) 【工作】	フクロウ型の時計を作る題材。フクロウの羽と時計の針には割りピンを使用し、可動する仕組みを作る。

4. スペインの教科書における「絵に表す題材」の分析

描画題材の特徴を分析するため、(1) 臨画の題材、(2) ぬり絵をする題材、(3) 絵の描き始めが示されている題材、(4) 背景が既に描かれている題材の4つに分類した。実際の題材を取り上げながら、その内容を考察する。

(1) 臨画の題材

臨画とは、手本を見て模写をすることである。臨画教育は、明治時代の日本でも行われていた。日本の図画教育の最初の教科書である『西画指南』(ロベルト・スコットボルン著、川上寛纂訳、文部省、明治4(1871)年)をみると、その内容は線の練習から始まり、陰影を付ける練習や写生を主としていた²⁰。それは、「正確な描写の能力を養うための系統的な練習」を目指すものであった²¹。教科書内容について最初に規定した明治5(1872)年公布の「小学教則」では、「上等小学」(四年制全八級)に『野画』として図画教育が課された²²。この教則に準じ、明治6(1873)年に、文部省によって『小學畫學書』(山岡成章画、文部省編、明治6(1873)年)が編纂された²³。その内容は、直線の練習から始まり、点線のマス目を使って図を描く練習や、瓶や杯など立体的なものを写す練習内容で構成されていた²⁴。毛筆を描画材料として編んだ教科書が現れ始める明治21(1888)年頃からもその内容は変わらず、「直線・曲線の練習→投影図→透視図法による立体図」という構成がとられていた²⁵。このように、明治期の美術教科書では臨画や野画が積極的に取り入れられ、体系的に技術を習得する内容で構成されていた。

現在の日本の教科書には臨画が扱われていないのに対し、スペインの教科書には現在でも臨画を扱っ

た題材がある。「Dibujar animales (動物を描く)」は、その一例である。導入の「Animales salvajes (野生動物)」では、動物の写真と絵を見て、対応しているもの同士を線で結び、動物の絵の下に名前を描く活動を行う。そして、描画題材の「Dibujar animales (動物を描く)」において、パンダとトラの手本を見ながら、そっくりに模写をする。お手本であるパンダとトラは、写実的な絵ではなく、子どもが親しみやすいアニメのキャラクターのような絵が扱われている。

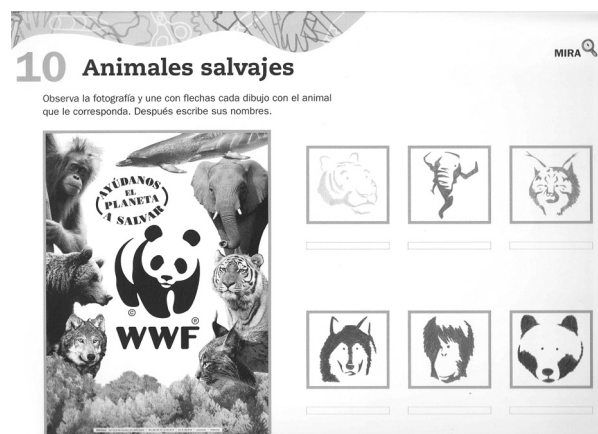


図5 「Animales salvajes (野生動物)」 p.24

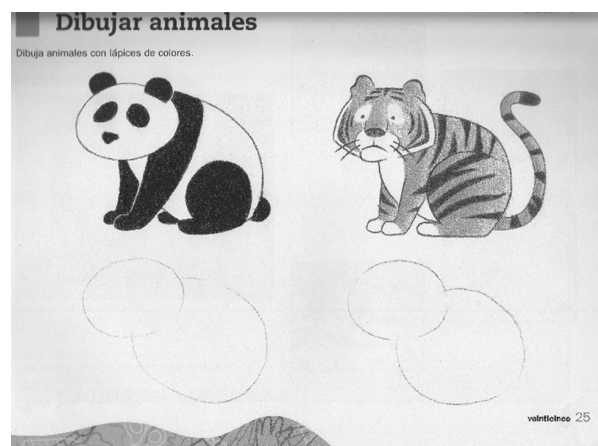


図6 「Dibujar animales (動物を描く)」 p.25

「Inventar carteles (ポスターを考案する)」は、図形を選び、組み合わせて、ポスターを考案する題材である。導入の「¿Qué dicen las señales? (記号は何を示す?)」において、それぞれの記号に文章を当てはめた後、教科書の図形から好きな図形を選び組み合わせてポスターを描く。組み合わせとして考えられるのは、そのままマークを描くか、禁止マークと組み合わせるかの二種類である。そのため、ほとんど模写の題材だと捉えられる。ポスターに使用する図形は、鉛筆で文字を描く図や歌を歌っている人の図、サッカーで遊んでいる人の図など、子どもたちの生活に関係のある行動を表す図形が扱われている。全ての図が単色で、シルエットで表されている。



図7 「¿Qué dicen las señales? (記号は何を示す?)」 p.12

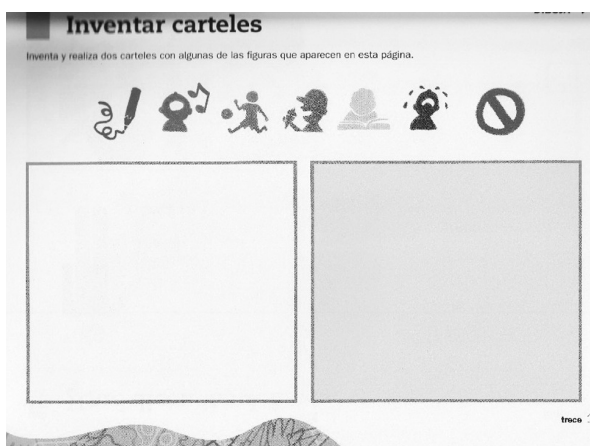


図8 「Inventar carteles (ポスターを考案する)」 p.13

「Dibujar en negro (黒で描く)」は、導入の「Un ciclista al sol (日中のサイクリスト)」で、自転車に乗る人のシルエットの写真を見ていくつかの質問

に答えたあと、シルエット画の手本を見ながら模写をする題材である。手本には、にわとりや牛、蛇といった動物が描かれている。柵や木の枝などは、細かい線で描かれている。

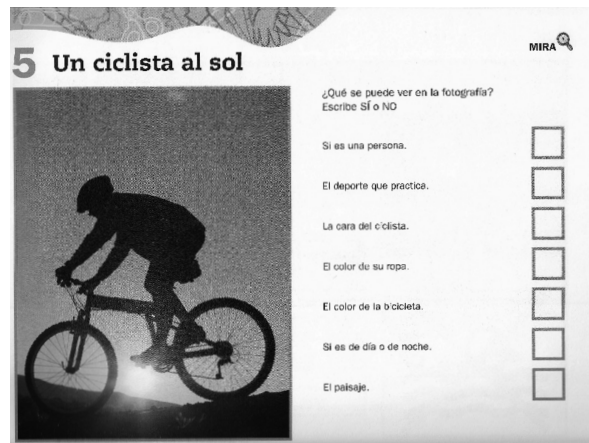


図9 「Un ciclista al sol (日中のサイクリスト)」 p.14

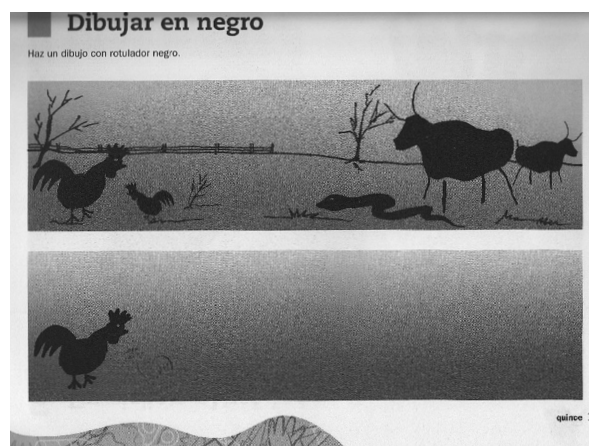


図10 「Dibujar en negro (黒で描く)」 p.15

①臨画の題材の考察

臨画の題材について考察する。「Dibujar animales (動物を描く)」は、輪郭線を基に、お手本を見ながら模写をする臨画題材であった。スペインの教科書は、子どもたちが思いのままに描くことよりも、対象を正確にとらえて表すことの方を重視していることが読み取れる。

「Inventar carteles (ポスターを考案する)」はポスターを描く題材であった。ポスターを描くとき、日本ではまず伝えたいことから考える。その一例として日本の教科書題材「楽しく美しく伝えよう」(日本文教出版『図画工作 5・6 上 心を通わせて』より「楽しく美しく伝えよう」pp.18-19)を取り上げる。この題材は、伝えたい内容に合わせ表現方

法を工夫して掲示物をつくる活動を行い、教科書には「ポスターで表す」方法が紹介されている。題材の説明文には、「伝えたい内容に合わせ、表現方法をくふうして掲示物をつくる」とある。また、「くふう」という項目には、「何を伝えたいかをしっかり考えて、計画的につくろう」とある。このように、日本では、伝えたい内容から考え、その内容に合わせて制作活動を行う。しかし、スペインの教科書ではマークの表す意味を読み取ることから始めている。子どもたちの'伝えたい'という思いよりも、ポスターのマークの表す機能的な面に重点を置いているところに違いがあると言える。

「Dibujar en negro (黒で描く)」は、シルエット画を制作する題材であった。手本用の絵と制作用の絵は、背景が全く同じであり、正確に同じものを描くことが求められていることが分かる。実際に制作すると、背景の柵の線や木の枝などが、まっすぐではなく歪んだ線で描かれているため、しっかり手本を観察して描く必要があった(図11参照)。また、説明文には「Haz un dibujo con rotulador negro. (黒いマーカーを使って描く)」という指示があったが、やり直しがきかないため、かなり集中力が必要であった。

以上のように、スペインの教科書は、臨画の題材を取り入れている。スペインの教科書は、発想や構想の能力よりも対象を正確に写し取る技術を重視していると言える。児童にとっては、達成すべき目標が明らかで、取り組みやすいかもしれない。また、教師にとっても、手本と同じものをそっくりに描かせればよいので指導しやすい。しかし、この活動は、相当な集中力が必要とされ、'指示されたことをやらされている'という義務感から、活動へ意欲の低下を招く危険性がある。小学校の初等段階の子どもたちが行う活動としては、検討する必要があると考える。

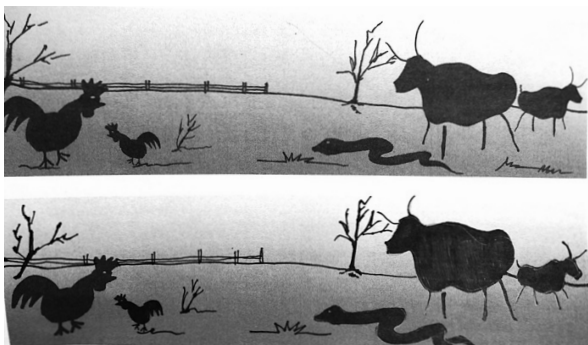


図11 「Dibujar en negro (黒で描く)」の制作過程

(2) ぬり絵をする題材

スペインの教科書には、ぬり絵を扱った題材がある。「Un bosque vivo (生きている森)」はぬり絵を扱った題材である。導入の「Un bosque quemado (焼けた森)」では、焼けた森の写真を見て感じる気持ちを考える。その後、制作活動である「Un bosque vivo (生きている森)」でぬり絵を行う。このように、「焼けた森」と「生きている森」という対照的な森の姿を扱っている題材である。「Un bosque vivo (生きている森)」には、既に左側が着色しており、それを参考にしながらぬり絵をする。

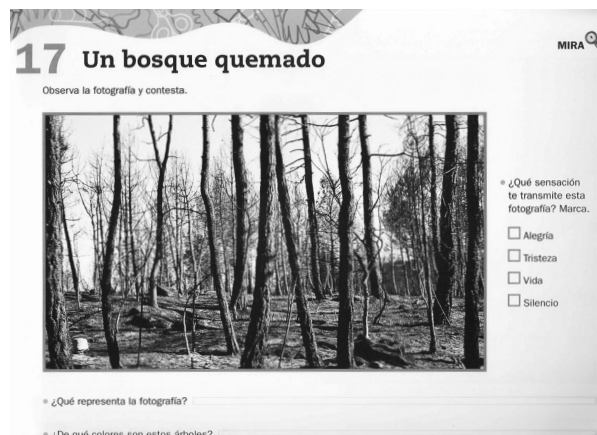


図12 「Un bosque quemado (焼けた森)」 p.38



図13 「Un bosque vivo (生きている森)」 p.39

①ぬり絵をする題材の考察

このように、スペインの教科書には、現在の日本の教科書では扱われていないぬり絵の題材が扱われている。導入で「焼けた森」の姿を鑑賞していることから、題材の「生きている森」では、「生きている」姿というものを意識して着色していくことができると考える。

「生きている森」の絵をよく見ると、木の胴体は

濃い部分と薄い部分のグラデーションになっている。子どもたちはそのような細かい絵のタッチを読み取って描画しなければならない。この時点での子どもの発達段階を考慮すると、少し高度なテクニックが要求されているように思われる。

(3) 絵の描き始めが示されている題材

日本の教科書題材では絵の描き始めが示されていることはない。しかし、スペインの教科書題材は描き始めが示されている題材が多くある。「Inventar decoraciones (装飾の考案)」は、その一例である。導入の「Colores diferentes (異なる色)」で、Joaquín Torres García 作の牛の像と絵画を鑑賞し、形や色に関する質問に答える。そして、「Inventar decoraciones (装飾の考案)」において、描画活動を行う。この題材には、左側に既に木や家が描かれている。そのため、既に示されている絵に続けて絵を描いていくことになる。

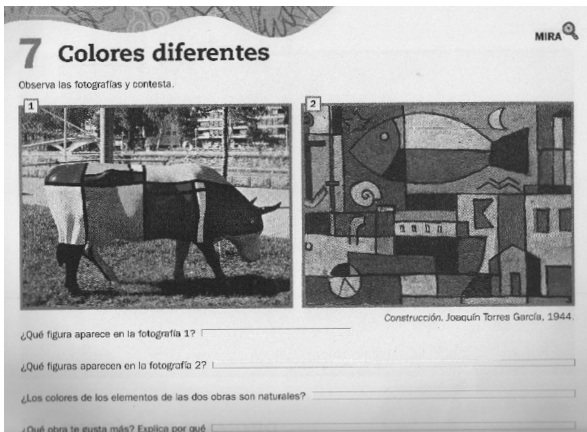


図14 「Colores diferentes (異なる色)」 p.18

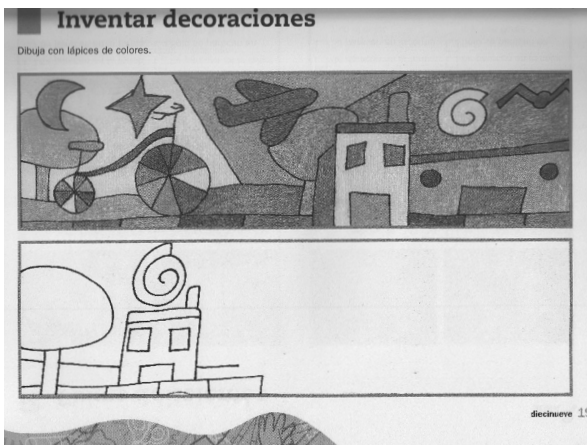


図15 「Inventar decoraciones (装飾の考案)」 p.19

「Dibujo sobre manchas (マンチャの上に描く)」は、マンチャ(汚れ)という技法で描かれている絵に、マーカーで民族陶芸品の絵を描いていく題材である。導入の「Cerámica popular (民族陶器)」では、民族陶器が並べられた写真を見て、その一部が切り取られた写真がどこに当てはまるかを考える。そして、描画題材の「Dibujo sobre manchas (マンチャの上に描く)」において、民族陶器の模様を装飾する。陶器の皿の半分は既に装飾されている。また、陶器の形は、既に背景に薄い色で描かれている。



図16 「Cerámica popular (民族陶器)」 p.28

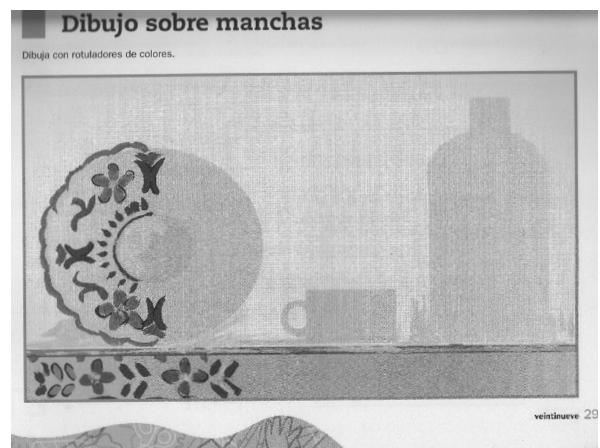


図17 「Dibujo sobre manchas (マンチャの上に描く)」 p.29

①絵の描き始めが示されている題材の考察

描き始めが示されていることで、描き始めが取りかかりやすいという利点もある一方、描くものの方向性が決まってしまうという問題点もある。描画指導の際、子どもたちにきっかけを与えることは大切である。しかし、そのきっかけがスペインの教科書のようにほとんど方向性が決められているようでは、子どもたちの発想や表現を狭めてしまうのではない

かと考察する。

(4) 背景が既に描かれている題材

スペインの教科書には、背景が既に薄く着色された絵の上に描画する題材がある。「Dibujar la Navidad (クリスマスの絵を描く)」は、好きな材料を用いてクリスマスの絵を描く題材である。導入の「Estamos en Navidad (それはクリスマスだ)」では、画像のイメージの違いに関する質問に答える活動を行う。「Dibujar la Navidad (クリスマスの絵を描く)」には、薄い色で、二人の人物が赤ちゃんを目の前にして祈る様子が描かれている。

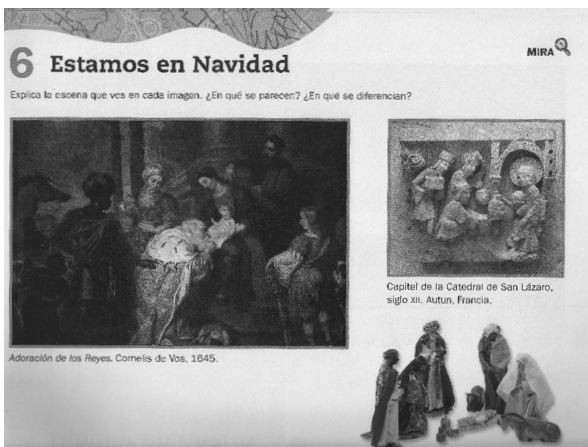


図18 「Estamos en Navidad (それはクリスマスだ)」 p.16

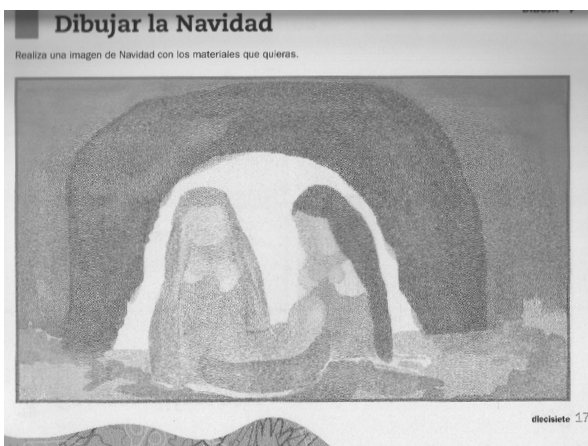


図19 「Dibujar la Navidad (クリスマスの絵を描く)」 p.17

「Colorear el día (昼間のぬり絵)」は、木々の絵が薄く描かれた背景に、クレヨンで絵を描く題材である。導入の「La noche (夜)」では、Vincent Van Gogh 作の「Noche estrellada. (星月夜)」を見て、それに似たいくつかの絵の中から似ていると

思うものを囲む活動を行う。「Colorear el día (昼間のぬり絵)」という題材名には「Colorear (ぬり絵)」という言葉が使われているが、輪郭線はなく、着色したり、自由に絵を描いたりすることができる。木々の絵は、水彩のような画材が使用され、柔らかなタッチで描かれている。

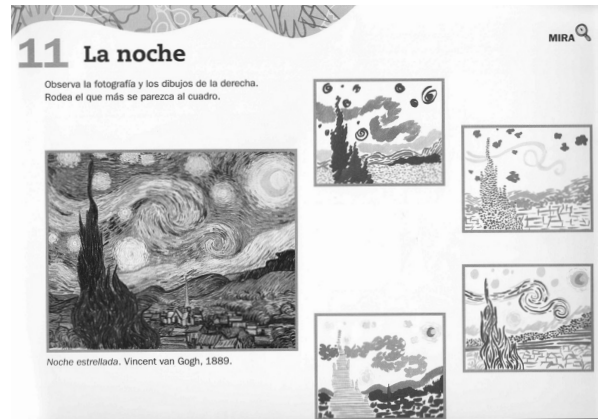


図20 「La noche (夜)」 p.26



図21 「Colorear el día (昼間のぬり絵)」 p.27

①背景が既に描かれている題材の考察

このように、スペインの教科書には、背景が既に描かれている題材が多数扱われている。今回、「Dibujar la Navidad (クリスマスの絵を描く)」を実際に制作した(図22参照)。大方の絵の色が既に着色されていたため、その色にあわせて塗る色を決めた。既に着色されていると、塗る範囲が分かり、色を迷うことなく塗り進めていけるというメリットもある一方、この通りに塗らなければならないという義務感を抱いた。背景が薄い色で着色されていたため、上から着色した色に影響を与えず、きれいに着色することができた。



図22 「Dibujar la Navidad (クリスマスの絵を描く)」の制作過程

5. 日本とスペインの初等美術教科書題材の比較

日本とスペインの教科書題材の比較を行う。比較する題材は、スペインの教科書題材の中で、「絵に表す題材」に分類されたものと、日本文教出版の教科書の中で、活動内容や使用する用具が類似している題材を選んだ。

(1) 両国の絵に表す題材の比較

スペインの題材「Inventar decoraciones (装飾の考案)」と日本の題材「大すき自分の線と色」(『図画工作3・4上 よさを見つけて』, 日本文教出版, 2011, pp.6-7)を比較する。スペインの題材は、まず、導入である「Colores diferentes (異なる色)」で、赤、黄、青と黒のコンポジションを使った牛の像と絵画を鑑賞し、形や色に関する質問に答える。そして、「Inventar decoraciones (装飾の考案)」でマーカーや色鉛筆を使って描画活動を行う。一方、日本の題材は、様々な形の線を考え、水彩絵の具の扱いに親しみながら好きな色をつくることを試み、表すことを楽しむ活動を行う。両題材は、色や形を考えて描画活動を行う点で共通していると言える。

【比較題材】

スペイン：「Inventar decoraciones (装飾の考案)」2年

日本：「大すき自分の線と色」3・4上 (絵に表す), 日本文教出版

【材料・用具】

スペイン：教科書を印刷したもの、マーカー、色鉛筆
日本：画用紙、マーカー、クレヨン、パス、絵の具

【制作過程】

◇スペインの題材の制作過程

①導入の「Colores diferentes (異なる色)」において作家の作品の鑑賞を行う。

「Colores diferentes (異なる色)」では、二つの作品の写真が取り上げられている(図14参照)。この二つの作品に関する質問が四つあり、それぞれに答えた。教科書に掲載されている質問の内容を以下に示す。

¿Qué figura aparece en la fotografía 1?

(写真1は何の形(図)を表していますか?)

¿Qué figuras aparecen en la fotografía 2?

(写真2は何の形(図)を表していますか?)

¿Los colores de los elementos de las dos obras son naturales?

(二つの作品の色の要素は自然ですか?)

¿Qué obra te gusta más?

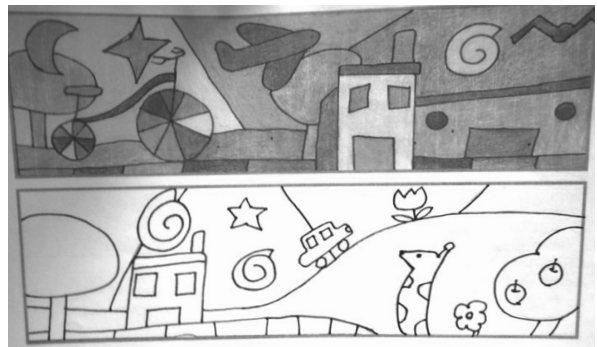
(あなたはどの作品をより気に入りましたか?)

Explica por qué.

(その理由を説明してください。)

②黒のマーカーで絵を描く。

黒のマーカーを使用し描画を行う。絵は左側の四分の一(木や家など)が既にしるされていたため、そこに続けて絵を描いた。



②色鉛筆で着色する。

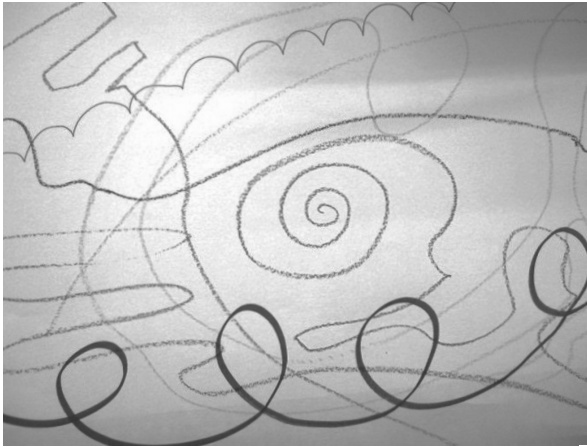
上の手本を参考にし、色鉛筆を使って着色する。



◇日本の題材の制作過程

①クレヨンやパスなどで線を描く。

画用紙いっぱいに、クレヨンやパスなどで一筆描きをする。



②絵の具を使って色を塗る。

色々な形が見えてきたら、絵の具で好きな色をつくって塗る。



③友達の商品とつなげて描く。

友達の商品とつなげて一枚のキャンバスにし、自由に描く。



ア 両国の絵に表す題材の比較についての考察

スペインの題材「Inventar decoraciones (装飾の考案)」の手本は、飛行機が赤に塗られていたり、自転車の写真が色とりどりに塗られていたり、既成の色にとらわれない色の塗り方をしている。そのため、絵に着色するときには、無作為に色を選び、様々な色に塗り進めた。一方、日本の題材「大すき自分の線と色」では、自ら様々な形の線を考え、様々な色をつくることを試みながら表した。

日本の題材について、日本文教出版の「年間指導計画作成資料」を見ると、「発想や構想の能力」の観点の評価規準の例では、「どのような形の線が面白いのか、どのような色が合うかを考えている」と示されている。このように、日本の題材では、「色が合う」ことを目標にしている。対するスペインの教科書は、導入で作家の作品を鑑賞することで、配色について気づきを得た後、描画題材の手本を参考にしながら描き進める。そのため、作家の作品や手本の影響から、ある程度配色が方向付けられることが予想される。手本がなく、子どもたち自身が色々試しながら配色を構想していき、「どのような色が合うかを考えている」ことを目標とする日本の題材とは対照的だと言える。

また、両国には、鑑賞活動の取り入れ方の違いが見られる。スペインの教科書は、導入の作家の作品を鑑賞した後に、描画活動を行う。一方、日本の題材は、描画活動を行った後、または最中に鑑賞を行っているという違いがある。

6. 日本では扱われていないスペインのぬり絵をする題材の考察

スペインの初等美術教科書題材には、臨画やぬり絵が扱われていた。臨画やぬり絵は、現在の日本の学校教育では行われていない。しかし、ぬり絵の本は書店で売られており、ほとんどの子どもが幼児期に行う経験であると言える。このように、スペインの教科書題材における特徴的な内容は、現在の日本では学校教育以外の場で普及している。では、なぜ現在の日本の教科書ではぬり絵の題材が扱われていないのか。その理由は明らかにされていない。しかし、ぬり絵の歴史やその影響、学校教育における捉え方から、四つの理由を考察する。

一つ目は、自由画教育運動である。山本鼎は、臨画教育を否定し自由画を奨励する自由画教育運動を

展開した²⁶。この自由画教育運動は日本の図画教育に大きな影響を与え、子どもが思いのままに表現する姿勢は現在でも残っている。自己表現や創造性の重視が、現在の教科書に反映されているのだと推測できる。

二つ目は、ぬり絵が玩具として認識されていることである。日本におけるぬり絵の源流は、江戸時代の木版刷りの本の挿絵だとされる²⁷。ぬり絵が明確に登場したのは、明治時代である²⁸。明治時代になり、欧米の科学技術と共に絵画技術も取り入れられた²⁹。そして、西洋画を基本とした図画教育が行われるようになり、その図画の絵手本として色を塗ることが行われるようになったという³⁰。「明治後期には、ハガキに絵が描かれていて、それに色を塗って送ると、賞金や賞品がもらえる事が流行し、多くの子供達がこれに挑戦し、この事が塗り絵の流行に拍車をかけた」という³¹。続く大正時代には、「ぬり絵帳も現れ、以後ぬり絵は、女の子の遊びの代表的なものになった」³²。戦後、爆発的な人気を集めたのは「きいちのぬり絵」である。昭和20年代の初め、日本のあちこちの路地裏の駄菓子屋で次々と売り出され、女の子達は目を輝かし、先を争って買い求めた³³。昭和25、6年頃には全国で月100万枚前後も売られたという³⁴。このように、ぬり絵はその流行から、子どもたちの生活の上での玩具として扱われていたことが推察される。

三つ目は、ぬり絵の教育的効果に対する否定的な意見である。ぬり絵が子どもに及ぼす影響については、様々な意見がある。まず、ぬり絵への否定的な意見を見ていく。金子マサ・山本紀久雄の『ぬりえ文化』（小学館スクウェア、2005）には、湯川尚文（1942）と霜田静志（1953）による批判文の紹介がある³⁵。多摩美術大学教授であった霜田は、雑誌『児童心理』（金子書房、1953年6月号）に「ぬり絵と児童画」と題した文章を寄稿し、ぬり絵の教育的効果を否定している³⁶。ぬり絵の問題性について、「ぬり絵ばかりさせていると、子供は与えられた形にたよって色ぬりするだけで、絵ができあがるのをおもしろがるようになってくる。その結果は、自分で工夫して描く自由画よりも楽でいいと考えるようになってくる。こうなると与えられた条件に服従する態度はできてくるが、近代の美術教育が目ざしている自由と創造の力は失われてしまう」と指摘する³⁷。霜田は、ぬり絵を子どもの「自由と創造の意

欲を妨げる」ものとし、大人の作った枠に子どもをはめこむぬり絵は差し控えるべきだと主張する³⁸。一方、湯川は、『児童と繪画』（総合美術研究所出版部、1942）でぬり絵への批判を述べている。ぬり絵の問題性について、「児童の創作心を全然容れる餘地がないばかりでなく、ただ思ひつきの色を無意味にぬる習慣や、輪廓線にのみたよつてものを描くやうになるといふ悪習慣」（原文ママ）が自然に養われると指摘する³⁹。さらに、『幼児の教育用語辞典』（教育出版、1975）では、ぬり絵について「女の子が一時好む遊びであるが、真の表現力を育てるためには弊害も多く、絵画製作の領域で取り扱うべきものではない」としている⁴⁰。

海外の美術教育者の意見もある。ローウェンフェルドは、ぬり絵のような模範的な学習方法は児童が自分で考える力を奪い、描きたいものを自由に描けなくさせると指摘する⁴¹。また、ぬり絵や練習帳は、子どもが自分の経験を表現することができないため、情緒的発散をする機会にならず、技術を伸ばすこともできないとしている⁴²。そして、最後には、「ぬり絵や練習帳は、子供におとなの概念を植えつけて、自分ひとりでは制作できなくさせてしまい、その結果、子供の創造的情熱を挫折させてしまう」と批判している⁴³。

ぬり絵への否定的な意見がある中で、肯定的に捉える意見もある。『ぬりえの不思議 心と体の発達に見るその力』（尾崎康子・古賀良彦・金子マサ・竹井史、ぎょうせい、2010）で、尾崎康子（2010）は、発達心理学の観点から、ぬり絵の必要性について言及している⁴⁴。「発達心理学の観点からみると、子どもは誕生した時から想像性や創造性を身につけているわけではなく、大人の模倣をしながら、また大人が与えた型を習得しながら、行動を獲得」していくとし、絵柄という型が与えられるぬり絵は、イメージ能力や描画能力が未熟な段階では、描画活動を楽しむことに対し有用であるという⁴⁵。また、鈴木純子（2012）は、「表現領域におけるぬり絵に対する否定的見解の検討」において、実験による検証から、ぬり絵の可能性を言及している⁴⁶。同論文では、4歳児を、一般的な描画を行った群と、ぬり絵を行った群の2群に分け、作業後に①気に入ったところはどこか、②だれにみせたいか、という質問を行った⁴⁷。その結果、「ぬり絵群の集中時間がより長く、作品に対する愛着も強い」ということが示さ

れたため、鈴木は「一般的絵画に比してぬり絵の方が有用な教材となる可能性」があると主張している⁴⁸。

ぬり絵についての批判点とぬり絵に期待できる効果について、初田隆(2007)は「ぬり絵のもっとも大きな特徴は絵柄が予め与えられているということ」だとし、それぞれについて述べている⁴⁹。批判点では、絵柄を、「与えられたパタンを塗るだけの形式的な作業と捉えるならば、本来絵を描くときに働くであろう対象への思いや感動、自由に形や色をかきすすめる力などが脆弱になり、自分の絵を描くことができなくなると捉えられる」ことを指摘している⁵⁰。一方、期待できる効果については、「絵柄が決まっていることで、取り組みやすく、色彩に関する学習に集中することができ、結果として絵画を親しむ態度や集中力などが養われる」ことを指摘している⁵¹。初田は、「学校というフォーマルな場では、『ぬり絵』に対する反発が相当根強いようであり、授業とぬり絵は相容れないものと捉えられている」としている⁵²。このように、現場においては、ぬり絵の教育的効果に対する否定的な意見の方が取りざたされ、授業においても相容れないものとして捉えられていることが理由の一つとして考えられる。

四つ目は、ぬり絵の評価を伴う場合の問題である。平成20年版学習指導要領図画工作編では、四観点として「造形への関心・意欲・態度」、「発想や構想の能力」、「創造的な技能」、「鑑賞する能力」が挙げられている。あらかじめ型が与えられているぬり絵の場合、「発想や構想の能力」や「創造的な技能」の観点において、どのような点を評価するのか問題があるといえる。また、芳賀正之(2008)は、レビュー論文で、初田の『『ぬり絵』の研究』について触れ、「本来、子どもにとって『ぬり絵』は生活における遊びの一種(視覚玩具)と捉えられる。それが学習となった場合、必然的に評価を伴うこととなり、『ぬり絵』では重要視されていない美的なものや技能までもが求められていくことが予想される。そのことと同時に、遊び的な行為として持つ『ぬり絵』の魅力や価値が薄れていく恐れはないだろうか」と指摘している⁵³。芳賀が指摘するように、ぬり絵に美的なものや技能までもが求められることで、その魅力や価値が薄れる可能性は否めない⁵⁴。このように、ぬり絵の評価における問題と、評価を伴った場合の技能や美的要素の要求の問題が、理由の一つ

ではないかと考える。

7. まとめ

スペインの初等美術教科書題材には、平面と立体の題材があり、そのほとんどが描画題材だということが明らかとなった。

また、描画題材においては、概ね作品鑑賞から制作に移るという過程が確認できた。導入の作品鑑賞では、作家の作品や写真を見て、色や形について質問に答えたり、好きな理由を答えたりする活動が取り入れられていた。

描画題材の特徴を分類すると、(1)臨画の題材、(2)ぬり絵をする題材、(3)絵の描き始めが示されている題材、(4)背景が既に描かれている題材の四つに分類できた。これらの特徴は、日本の描画題材とは対照的である。

臨画の題材を取り入れているスペインの教科書は、発想や構想の能力の育成よりも対象を正確に写し取る技術を重視していると言える。また、臨画やぬり絵の題材の絵を見ると、細かい線や淡いグラデーション等が使用され、低学年だということを考慮すると、日本よりも高度なテクニックが要求されていると言える。

また、スペインの教科書には、絵の描き始めが示されている題材や、背景が既に描かれている題材があり、子どもたちの支援につながると考えられる一方で、描くものの方向性が決まってしまうという問題点もある。特に、背景が既に描かれている題材は、塗る範囲がわかり塗り進めやすい一方で、絵の全体の雰囲気が決まってしまうたり、子どもたちが色をあまり塗らなくても絵が完成してしまったりする可能性もある。

スペインの教科書の描画指導に関する題材の分析により、スペインの教科書は日本よりも技術面が重視されていることが明らかとなった。現行の日本の学習指導要領を考慮すると、このような題材をそのまま取り入れることには懸念がある。一方で、描画活動の前に、導入として作家の作品や写真を鑑賞する活動を取り入れるなど、低学年の段階から作品の鑑賞の活動を描画活動に生かそうとする傾向がみられた。今後も、教科書題材の分析を進め、その動向を明らかにしていきたい。

謝辞

本研究の執筆にあたり、富山大学に留学中である

スペイン出身のソフィア・パストル・マタモロス氏にご協力頂きました。心から感謝申し上げます。

- 1 隅敦「スペインマドリッド自治大学との交流を通して：国際交流の始まりと継続にあたって」『教育実践研究：富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要（7）』, 2013, pp.121-134
- 2 教科書の発行に関する臨時措置法 第二条
- 3 金子亨・藤井康子「スペインの美術教育の現状 I 一教科書分析を中心として ①初等教育の段階一」『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系57』, 2005, pp.133-146
- 4 前掲注3, p.143
- 5 前掲注3, p.143
- 6 前掲注3, p.143
- 7 藤井康子・金子亨「スペインの美術教育の現状 II 一教科書にみる制度及び内容に関する研究（初等教育）一」『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系58』, 2006, pp.51-66
- 8 前掲注7, pp.55-58
- 9 前掲注7, p.58
- 10 前掲注7, p.58
- 11 前掲注7, p.58
- 12 前掲注7, p.63
- 13 藤井康子・金子亨「スペインの美術教育の現状 III 一教科書における基礎的な力の育成について（初等教育）一」『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系59』, 2007, pp.25-42
- 14 前掲注13, p.40
- 15 金子亨・藤井康子「スペインの美術教育の現状 IV 一初等美術教科書にみられる教育内容の一例一」『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系60』, 2008, pp.67-80
- 16 前掲注15, p.79
- 17 前掲注15, p.80
- 18 前掲注13, p.27
- 19 縦23.3cm×横30.5cm
- 20 林曼麗『近代日本図画教育方法史研究 一「表現」の発見とその実践』東京大学出版会, 1989, pp.18-19
- 21 前掲注20, p.19
- 22 中村隆文『「視線」からみた日本近代一明治期図画教育史研究』京都大学学術出版会, 2000, p.7
- 23 前掲注22, p.72
- 24 前掲注22, p.73
- 25 前掲注22, p.89
- 26 金子一夫『美術科教育の方法論と歴史』中央公論美術出版, 1998, p.175
- 27 多田敏捷『おもちゃ博物館⑭ うつし絵・着せかえ・ぬり絵』京都書院, 1992, p.4
- 28 前掲注27, pp.4-5
- 29 金子マサ・山本紀久雄『ぬりえ文化』小学館スクウェア, 2005, p.108
- 30 前掲注29, p.108
- 31 前掲注27, pp.4-5
- 32 前掲注27, pp.4-5
- 33 前掲注27, p.5
- 34 前掲注27, p.5
- 35 前掲注29, pp.54-62
- 36 霜田静志「ぬり絵と児童画」『児童心理』（1953年6月号）, 金子書房, 1953, pp.36-41
- 37 前掲注36, p.39
- 38 前掲注36, pp.36-41
- 39 湯川尚文『児童と絵画』総合美術研究所出版部, 1942, p.254
- 40 阿部明子「ぬり絵」, 平井信義編著『幼児の教育用語辞典』教育出版, 1975, p.225
- 41 V.ローウェンフェルド著, 竹内清・堀内敏・武井勝雄共訳『美術による人間形成：創造的発達と精神的成長』黎明書房, 1963, p.46
- 42 前掲注41, p.47
- 43 前掲注41, p.47
- 44 尾崎康子「ぬりえは教育や保育に不必要か」『ぬりえの不思議 心と体の発達に見るその力』ぎょうせい, 2010, pp.150-151
- 45 前掲注44, p.150
- 46 鈴木純子「表現領域におけるぬり絵に対する否定的見解の検討」『実学教育研究』北社会学園付属医療福祉教育研究所 実学教育研究編集委員会, 2012, pp.9-24
- 47 前掲注46, pp.15-16
- 48 前掲注46, p.9
- 49 初田隆「『ぬり絵』の研究」『美術科教育学会誌（28）』, 2007, p.328
- 50 前掲注49, p.328
- 51 前掲注49, p.328
- 52 前掲注49, p.328
- 53 芳賀正之「美術教育の実践的課題を捉えた理論研究の深化・充実に関する考察」『美術科教育学会誌（29）』, 2008, p.693
- 54 前掲注53, p.693

(2014年5月20日受付)
(2014年7月9日受理)